

東日本大震災 岐阜民医連支援ニュース

=ここは一つ、オール民医連で全国の仲間とともに困難を乗り越えよう!=

N0. 15

2011. 4. 4

岐阜民医連支援対策本部

第4次支援は岩原・岩田両ケアマネージャーが

第4次支援にはケアマネージャーの岩原さんと岩田さんが、本日早朝出発しました。全日本民医連の定期便を利用し8日までの支援予定です。今後、現地の状況を逐次報告予定です。

坂病院 震災から3週間の節目に全職員集会

震災から3週間という節目にあたり、坂総合病院で全職員集会が開催されました。

まず、震災で亡くなられた方に対して黙祷をささげました。続いて、全日本民医連・廣田次長から、現時点での全国からの支援者の数の紹介と、震災2週間目に全職員に発信された藤末会長のビデオメッセージを上映しました。今田院長の挨拶では職員の多くが被災しながらも、震災直後から献身的な救済活動と、坂の医療保持のために全力をあげて奮闘されたことに対して、心から感謝の意を表明されました。

職員の発言では共通して、自らも厳しい環境におかれても、坂の医療をなんとしても守らなければならないという気概で、家庭をも顧みないで頑張ったことが、涙ながらに語られました。また、震災直後から全国から民医連の仲間の支援が始まり、民医連のすばらしさを改めて実感したことが語られました。18日間にわたる避難所に対する医療活動の概要も報告されました。それによると、多賀城市の14か所の避難所では2729人の診察を、塩竈市の16か所の避難所では573人の診察を行い、両方で2167人に処方をしたとのことでした。民医連の医療チームは、全国からの混成チームにもかかわらず、どこの医療チームよりもチームワークとフットワークでは最高のチームで、被災者の医療要求に即した活動を展開しました。避難所での要求は日々変化します。最近では「足湯」が人気です。避難所で生後2か月の新生児の沐浴をするといった経験も紹介されました。最近では廃用予防のために、避難所で2時間程度のデイケアなども行っています。精神科の医師からは、職員や被災者のメンタルヘルスについて話がされました。

最後に職員一同のアピールが読み上げられ、全員で全国への感謝の意を表した横断幕をバックに記念撮影を行いました。



今後の支援予定

全日本民医連のあらたな方針に基づき支援日程については今後見直す予定です

第5次:4月11日(月)~4月15日(金) < >

第6次:4月18日(月)~4月22日(金) < >

第7次:4月25日(月)~4月29日(金) <宇野予定、須田予定>

を予定しています。いずれの支援も全日本民連の定期便を利用します。

行き:6時14分岐阜駅発⇒8時37分御茶ノ水着 9時全日本民医連出発

帰り:9時30分宮城出発⇒15時頃東京駅着 新幹線にて 19時頃岐阜駅着

今日までの支援者数: 17名

医師: 4名

看護師: 2名

薬剤師: 1名

理学療法士: 1名

事務: 5名

ケアマネ: 2名

学生: 2名

4月4日現在の義捐金集約: 1,800,795円です

全日本民医連ホームページに震災支援関係のニュースや動画がアップされています。ぜひご覧ください。

震災支援に関する取り組み状況を対策本部(土井:msnr-doi@gifu-min.gr.jp)までお寄せください。

シリーズ震災支援報告 5 <支援隊の震災支援報告をシリーズで掲載します。>

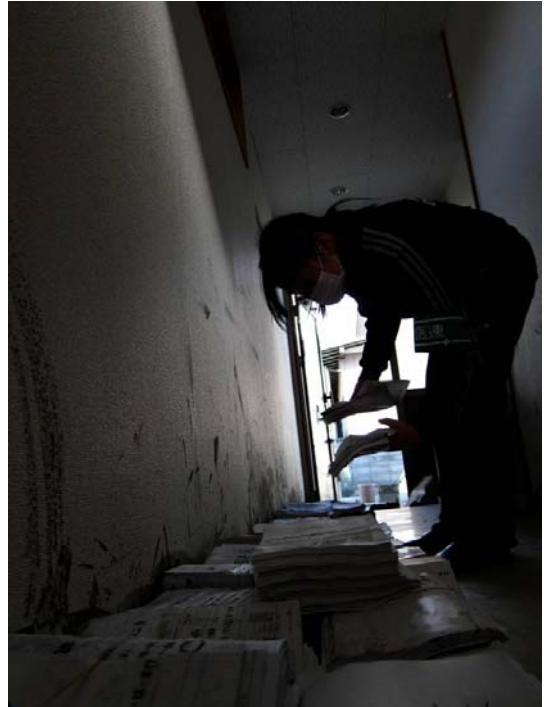
■つばさ薬局

松島海岸診療所のそばには同じく民医連の「つばさ薬局」があります。次はここへの支援です。

つばさ薬局に到着すると先に来ている支援者達がただ黙々とカルテからヘドロを落とす作業をしていました。まだここでは調剤室内のヘドロ除去がすすんでいません。私たちは調剤室の清掃と濡れた処方せんを並べること、そして壁の清掃などを任せられました。PC は全て水に濡れて駄目になってしまっていました。バックアップデータも一緒です。見たことのあるシステムだったのでお話をきくとやはりファルマネットと同じシステムを使っています。

事務の方は「今月の支払いとか請求とかってどうなるのでしょうか？」と心配していました。全てのデータを失ってしまったのですから当然そんな心配もよぎるでしょう。まだ通達はないそうです。
濡れた処方せんを並べる医学生

先ほどの患者宅もそうですが、今回参加してくれた二人の医学生は本当に良く働いてくれました。力仕事が多いのですが率先して何かをしようとする姿に本当に連れてきてよかったです。



実は医学生を当初連れて行くことは反対でした。

何百キロを車で移動するという危険性はもとより福島の原発の状況が落ち着いていないこの中で安易に連れて行けるのか不安だったからです。

確かに危険性はありました。その分無理をしないことと最悪の状況での回避帰宅方法を考えておきました。何かあつたら全て私たちが彼らを守る覚悟でいました。

彼らには見せられるもの全てを見てもらいたかった。私たちは帰りの時間を遅らせて松島を歩きました。



家からはヘドロにまみれた家財道具がすでに道のそこのかしこに出されていました。まだ乾いてもいないヘドロがおみやげ屋さんの店舗中に広がっているのが見えます。津波の恐ろしさがこれだけでも判るのですが、ここは湾になっていてまだ被害が少ない方であるとのこと。いったいこの先にどのような光景が待っているのか…

私たちは夕刻に松島を離れました。

続く……

(戸崎)

